

- (4) 「国宝医書目録」、『日本医史学雑誌』、一三三四号（一九三  
四）。
- (5) 石原明「明堂経について」、『漢方』一卷四号（一九五二）に  
より明らかである。
- (6) 石原明「梶原性全の生涯とその著書（二）」、『日本医史学雜  
誌』、六卷四号（一九五六）。
- (7) 室町写本。卷一。宮内庁書陵部所蔵。  
（北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史学研究室）

ジョン・スノーとその麻酔科学  
の業績——とくにその著書 “On  
the inhalation of the vapour of  
ether in surgical operations” に  
いて

松木明知

1

昨年の本総会で、演者は世界で最初の麻酔科学の単行本  
とその著者であるジェイムズ・ロビンソンについて報告し  
たが、今回は、その著書に遅れること数ヶ月して発行され  
たジョン・スノーの「On the inhalation of the vapour of  
ether in surgical operations」について報告する。

2

一九八〇年九月ハンブルクで開催された第七回世界麻酔  
学会において、「麻酔科学の過去と未来」というシンポジ  
ウムが開催されたが、その席上オックスフォード大学の初

代の麻酔科学教授サー・ロバート・マッキントッシュは、英国の麻酔科学が世界的にも高い水準にあるのはジョン・スノーに負う所が大であると、彼の業績を激賞し、麻酔科学を学ぶものはすべからず、前述したスノーの著書を熟読すべきとした。

演者は右のジョン・スノーの著名入りの本を入手し、さらにロンドンで彼の事績について調査した結果、従来知られていなかった二、三の新知見を発見した。

### 3

ジョン・スノーは一八一三年ヨークに農家の子として生まれ、十四歳でハードキャッスル医師の許に弟子入りし、ニューキャッスル王立病院などに勤務した後、ロンドンに出、一八三八年には王立外科学会会員となった。

一八四一年医師となつてはじめて研究発表を行ったが、新生児の仮死に関するものであった。

一八四六年十二月十九日、アメリカからエーテル麻酔の情報が英国へ伝えられたが、呼吸に関心をもっていたスノーの耳にも、エーテル麻酔のことが達したに違いない。

英国においてエーテル麻酔が最初に行われたのは、歯科医ロビンソンの診療室であったが、そこは当時のスノーの住居からすぐ近くであった。またスノーの勤務していた病院でも十二月二十一日エーテル麻酔が行われたからである。

このようにしてスノーは臨床麻酔に興味をもち、世界で最初の麻酔専門医となった。

### 4

スノーが麻酔科学に興味を持ち始め、臨床を開始してから半年して、それまでの経験をB5判八十九頁の本にまとめて出版した。

内容は、序文（一八四七年九月）、麻酔深度の五期分類、導入・覚醒時の深度についての記載、エーテル吸入器と構造、広い気道と容易な呼吸の必要性、吸入に適したエーテルの性状、吸入エーテル薬、吸入方法、体位、エーテルによる興奮などが述べられ、最後にセント・ジョージ病院、大学病院でスノーが麻酔を行った症例のリストと附録が附されている。

中でも注目すべきは、スノーが麻酔の深度を五期に分類していることで、これが現在われわれが用いているゲデルの麻酔深度の先駆的業績である。このこと一つを取り上げても、いかにスノーが臨床的観察がすぐれていたかが理解される。

スノーがいつから麻酔科学に興味を持ち始めたかについては、これまで何も言及されていない。

従来の研究では、本書に見るセント・ジョージ病院におけるスノー麻酔リストによって、最初の例は一八四七年一月二十八日であったことが知られる。

しかしこれより丁度一ヶ月前、ロビンソンの診療室にスノーが赴いてエーテル麻酔を見学している事実を演者は発見した。

このことは、スノーがエーテル麻酔に当初から非常な興味を持っていたことを物語るものである。

このほか演者が新しく発見した史料についても言及する。

(弘前大学医学部麻酔科)

## 『図経本草』所引の「張仲景医書」について

真柳 誠

後漢末から魏・晋間頃の成立と考えられる「張仲景医書」に由来し、現代に単行本として伝存するのは、『傷寒論』『金匱要略』『金匱玉函経』の三書のみである。しかも北宋政府校正医書局がこの三書を校刊する以前の伝承経緯は極めて不明瞭なため、各書に成立当時の旧態がどの程度保持されているかは常に疑問視される場所である。だがこの問題については、目録学的研究に加えて、歴代の文献に記録されている佚文との校勘を行なえば、ある程度まで推察することが可能である。もちろんそのためには、成立と現伝の経緯が明らかで、宋以前に「張仲景医書」の佚文が引用された文献が必要である。

『図経本草』は北宋の嘉祐六年(一〇六一)に太常博士の蘇頌が完成、翌嘉祐七年に刊行された薬図と解説からなる